
当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

「AA 研共共課題「東南アジアにおけるイスラーム主義と社会・文化要因の相互作用に関する学際的研究(2)ーミクロとマクロの視点から」

2025 年度第 1 回研究会（通算第 7 回目）

2025 年 6 月 20 日（金）14:00-18:30

場所：AA 研 306

使用言語：日本語

プログラム

14:00-16:00

「都市ムスリム貧困層にとっての大衆組織：ジャカルタの三組織比較」岡本正明（京都大学）

16:15-18:30

「ブカシ市『カンブン・パンチャシラ』における日常ーヒンドゥ教徒とムスリムの共生をめぐって」吉田ゆか子（AA 研）

概要：2025 年 6 月 20 日（金）に 2025 年度の第 1 回研究会を実施した。

当日は岡本正明氏によるインドネシアの大衆組織とムスリム貧困層の関係に関する報告、ならびに吉田ゆか子氏によるジャカルタにおけるバリ出身者コミュニティとその活動に関する報告が行われ、またそれぞれの発表に対して参加者による質疑応答が実施された。それぞれの発表内容の概要は下記の通りである。

報告 1：「都市ムスリム貧困層にとっての大衆組織：ジャカルタの三組織比較」岡本正明（京都大学）

本発表では、インドネシアの首都ジャカルタで活動する 3 つの大衆社会組織の一般構成員に対するサーベイ調査の結果を報告した。ノースらが言うように、マックス・ウェーバーが言うような、近代国家が暴力を独占している社会は二ダースにも満たない（North, Wallis and Weingast 2013）。どの社会にも、民間軍事請負会社、警備会社のような合法的に武力を使う組織や、テロリスト集団やマフィアのように非合法に武力を利用して勢力拡大を図る組織も存在してきた。それ以外にもよく見られるのは、グレーゾーンに存在する組織である。民兵団などは、組織として合法であっても、具体的活動では武力を武器として違法活動をしているようなことも多く、国家アクターがそうした活動を放任・容認して

いたり、国家アクターが結託してそうした活動が行われていたりすることもある。本発表で取り上げた大衆社会組織とは、インドネシア語で Organisasi Masyarakat(Ormas)と呼ばれており、国家によって認められた組織でありながらも、軍隊のようなユニフォームを持ち、暴力をリソースとして、借金取り立て、土地収用、歓楽街などでの警備請負、路上駐車からの駐車料取り立て、密輸などのビジネスを行っていることから、チンピラ組織などとも呼ばれている。政治家、警察、軍、地方自治体幹部などと強いコネクションを持つことで資金獲得をし、違法行為を黙認してもらって組織としての生存・拡大を図っていることが多い。

インドネシアではこうした大衆社会組織は政治化しており、こうした組織の幹部は国会・地方議会議員になったり、大臣になったりするようなこともあるほど、政治参加している。そのため、さまざまな研究が行われてきた。しかし、先行研究はこうした組織の一般構成員に着目してこなかった。一般構成員は貧困層出身者が多く、もっぱら金目的で参加し、組織のエリートに都合良く使われる存在のようにみなされてきた。本発表では、インドネシア国立イスラーム大学シャリフ・ヒダヤトゥラー校の教員らと共に行ったジャカルタでのサーベイ調査にもとづき、一般構成員はどういった人たちで、どういったイデオロギー的・社会的特徴を持つのかを明らかにした。

サーベイ調査は2023年2月から11月にかけて、ジャカルタで存在感のある3つの社会組織の一般構成員に対して行った。3つの社会組織とは、パンチャシラ青年団、アンソール、ブタウィ友愛フォーラムである。パンチャシラ青年団は国粋主義的なイデオロギーを持ち、アンソールは、インドネシア最大のイスラーム社会組織ナフダトゥール・ウラマーの一翼を担っており、イスラームを核とする組織である。ブタウィ友愛フォーラムは、ジャカルタの地元っ子であるブタウィ人たちが互助組織的に作り上げた組織である。このように特徴を異にする三組織から、ランダム・サンプリングで一般構成員各100名ほどを選択して、サーベイのトレーニングを受けたイスラーム国立大学の学生たちにサーベイ調査をしてもらった。

サーベイ調査からは、一般構成員は一般に言われている通り低所得者の男性が圧倒的ではあるものの、そこまで低学歴ではないことがわかった。また、一般構成員が大衆社会組織に入る動機は、予想とは異なり、それぞれの組織の持つイデオロギーに共鳴したからというものが多かった。また、安心を得るために加入するというものもおおかった。興味深いのは、経済的動機は加入理由としてそれほど強くないものの、アンソールやブタウィ友愛フォーラムに所属すると職種に改善が見られていた。明らかにマスキュリニティを強調する男性優位文化に属していた。例えば、男女平等を支持する一方で、男性が稼ぎ、女性は家事をする価値観を重視していた。非常に頻繁に構成員同士で接触しており、予想以上に強い人間関係を構築していた。一般のジャワ人と比べても幸福度は高かった。愛国心が強く、宗教的には、礼拝を欠かさないなど敬虔な側面を持っていた。こうしたことからすると、貧困にあえいで不幸で大衆社会組織に入ることによって経済的機会を獲得しているという

認識が一般構成員にあるわけではない。大衆社会組織に入っている構成員はそれなりに幸せで、頻繁に構成員同士でコミュニケーションを取るマスキュリンな男性のようである。

報告2：「ブカシ市『カンブン・パンチャシラ』における日常—ヒンドゥ教徒とムスリムの共生をめぐって」吉田ゆか子（AA 研）

多様な民族集団が集うインドネシアのジャカルタとその周辺（Jabodetabek、以下ジャカルタ首都圏と表記）において、バリ・ヒンドゥ教コミュニティやその活動はどのように維持されているのだろうか。発表者は、宗教的・文化的マイノリティであるバリ人たちが、居場所をつくり、宗教実践を展開し、また周囲のマジョリティ（ムスリム）と関係を築く様子を、ブカシ市にある、「カンブン・パンチャシラ」と呼ばれる地区を事例に考察している。今回の発表は、今年3月の現地調査の成果を中心としたやや速報的なものであったが、特にラマダンおよびラマダン明けの行事と、ヒンドゥ教の新年ニューピに関連する一連の行事が重なった時期の、地区の様子や住民たちの活動を取りあげ考察した。

1990年代初め、もともと農地や草地であった郊外の土地が住宅地として整備され、それをバリ人たちが誘い合って買った。現在この地区の全64世帯のうち19世帯がバリ・ヒンドゥ教徒の世帯である。マジョリティはムスリムであるが、西ジャワ州の9割以上をムスリムが占める中、この地区ではヒンドゥ教徒の割合が突出して高いと言える。ヒンドゥ教徒、すなわちバリ人の住民の中には、音楽演奏や、舞踊、彫刻、絵画などに秀でた者たちが多く、彼らがバリ風の家を建て、絵や植物で路地を飾り、音楽演奏をしたりした。

この地区は、このように絵や芸能といったわかりやすい形でバリ文化表象をできるという特徴がある。現在この地区は、市長の支援のもと観光地としての整備を進めており、軍からは、建国5原則のモデルケースとして「カンブン・パンチャシラ」の呼び名を授けられた。このようなことから、上記の「わかりやすい表象」を民族・宗教間の融和をアピールしたいブカシ市長、軍などが利用／活用しているという構図を読み取れる。また政治的な主張は控えめにしながら、「文化・芸術」で存在感を示すという、バリの人たちの戦略を見て取ることも可能である。他方で、調査では、宗教的他者と共生をするための、住民間でのミクロな調整や譲歩も見られた。互いの宗教行事を訪れ、共食し、相手の宗教実践や生活習慣に配慮する。こうした営みを紹介しながら、この地区がバリ人住人にとって、バリ人の宗教実践をある程度気兼ねなく表現できる、安全な場として存在していることを論じた。

質疑・応答では、多宗教間の共生における、共有しやすい領域としての芸術・芸能の役割や、こうしたコミュニティ活動に頻繁に招待される地元の軍および警察の役割などについて議論された